

会長挨拶

これからが本番勝負だ

国大化学会会長 樋口 修一郎（昭和 35 年 2 部応化卒）

〈初年度は合格点〉

3 同窓会が一つの〈国大化学会〉に統合されての初年度・2007 年度が終わり、6 月 29 日の第 2 回総会での締めと第 2 年度のスタートが具体化された。初年度は、意義ある 3 会統合をスムースに立ち上げるのが先ず最大の期待であり、役割でもあった。この点においては、初年度は合格点を得られるものと考えている。これも、ひとえに会員の皆さまのご支援・ご理解の賜物であると、改めての御礼を申し上げる次第である。

〈国大化学会メダマが着々と〉

その 1: OB ではない先生方・学生がらみ

まず、新国大化学会の発足に合わせて導入した新しい施策の実施状況を、順次見てみたい。

国大の卒業生ではない先生方も正会員に、そして副会長他の役員にも就任して頂いた。また、従前から会員ではあった学生会員からも役員就任を願った。この二つの革新的できごとは、

- 後述する支援制度の具体化において、学内の強力な陣容として良く機能した。そのお陰で、早期に新制度の実践ができた。
- 学生役員には、昨年も今年も HCD の実行委員の役に就いて頂いており、全学的に学生役員の存在感を高めている現実にある。

というような、実効を上げており、喜ばしい限りである。

〈国大化学会メダマが着々と〉

その 2: 国大化学会教育研究支援基金

新・国大化学会のもう一つのメダマが、国大化学会教育研究支援基金制度の新設である。この基金は、1 年前の 3 同窓会が一つになるときに、

- 各同窓会の保有財産を新同窓会に拠出するに当ってのレベル合わせの結果として、820 万円の基金設定

でスタートしたもので、その詳細の具体化が急がれていたものである。先ず、具体化第 1 陣として、

- 国内外の学会への〈参加費〉を助成することでスタートした。6 月 29 日の総会の席上で第 1 陣の 2 人に手渡しをし、実質的な運用のスタートを期した。この制度と従前から行っている〈OB と語る会〉とでクルマの両輪となるものだ。

本制度については、

- 支援対象を拡大すると共に、会員からの寄付の何割かを本基金に繰り入れることを以て、会員の支援直接参加意欲を具現化すること等を含めての発展を期す

運びとしていくのが一つの方向ではないかと考える。

〈課題も〉

その 1: 会費

今後の発展を期すには、課題も存する現実にある。その一つは、会費等の収入金の低迷である。ここ 10 年間の状況を表に示すが、

- 2007 年の収入金の落ち込みが目立つ。これが、新同窓会の発足に起因するものか否かはまだ不明ではあるが、親しんだ旧同窓会名称の消滅が一つの原因ではないか、との危惧も含めての対応が必要となってきている。
- 更に、所要経費水準にまで収入金の増加を図る抜本策が必須もある。

〈課題も〉

その 2: クラス幹事

大きな世帯となった国大化学会における〈クラス幹事〉機能をどうするかも大きな課題の一つであることは、論を待たない。旧制度のままでは、百数十人のクラス幹事体制となってしまうからである。

会員からの収入金の推移

区分	98 年	99 年	00 年	01 年	02 年	03 年	04 年	05 年	06 年	07 年
会員からの収入金*	5,089	6,368	4,844	4,179	4,762	5,441	5,286	5,326	5,467	4,272
千円	3 年平均 5,413									
指 数	3 カ年平均=100			77	76	100	97	98	101	79

* 年会費・寄付（維持会費含む）の合計額

〈次期役員の選任〉

ホームカミングデーが11月開催とされてきたので、従前は11月開催であった我々の同窓会の総会等を6月開催に変更して、本年がその2回目となった。その結果として、国大化学会の役員の選任について〈最適な運用〉をしていく運びである。

2009年4月からの新役員の選任について、その要点は、

- 本年11月頃までに、新役員の候補を選任する。
- この候補を、役員会で仮承認する。
- 仮承認された役員で、2009年4月からの国大化

学会の活動計画・予算計画等を策定し、実質的にスムースな活動推進を図る。

- 仮承認されている役員を2009年6月開催予定の総会に付議して、承認を得る。

〈本物には：みんなの力〉

新生〈国大化学会〉がホンモノになっていくには、

- 会員皆での力の結集が必須である。

ことを再確認し、会員の皆様のご協力・ご尽力を重ねてお願いする次第である。